

## 2024年 7月 浜松聖書集会のご案内

(時間: 午前10時 ~ 正午)

- 7月 7日 (日) 集会  
司会: 永井 徹 (クリエート浜松 22号室)  
聖書講話: ミカ書 2章1節~13節  
「嗣業の強奪批判から救いの預言へ」 水戸 潔
  
- 7月14日 (日) 集会 (アクト研修交流センター36セミナー室)  
司会: 生江 扶左子  
聖書講話: ルカによる福音書 10章38~42節  
ローマ信徒への手紙 13章8~10節  
「安らぎの場」 石原 潔
  
- 7月28日 (日) 集会 (アクト研修交流センター36セミナー室)  
司会: 大手 美千代 感話: 笹井 あかね  
聖書講話: ヨハネの黙示録 12章  
「サタンとの戦い 死に至るまで命を惜しまなかった」 武井 陽一  
  
サタンは女の子孫たちに戦いをいどむ しかし心配ない 溝口 正

サタンは天においてすでに敗北し滅亡は間近い。キリスト者の苦難の期間はその時までである。その間、神が共に居て守り養いたもうから…。

さて私は12章を以上のように読んできた。黙示録の著者ヨハネは、新約時代に入りますますサタンの活動が激しさを加えた理由を、サタンが天の戦いに敗れて地上に降り、この世を拠点に荒れ狂うに到ったから、と解していることが分かる。たしかにサタンは、地上において人の子イエスを荒れ野に誘惑し、十字架にさらし、多くの信徒たちを殉教と苦難に追い込んだ。新約の時代を迎え、キリストの福音が宣べ伝えられてより約二千年が過ぎ去った今日も、相変わらず、否、いっそう激しい誘惑と脅かしがサタンから加えられている。サタンは果しなく進む科学技術を支配して、神の支配に抵抗している。国も人もエゴをむき出しにしてサタンの餌食(えじき)となり、この世の混迷と腐敗は底知れず、いよいよ終りの日の近いことを我々に予感させる。今や、サタンが地上を舞台に最後の毒牙をむいていると解釈した著者ヨハネの観方は、今日ますますその現実感を増してきたように、私には思われる。

もう一つ確認したいことは、天におけるキリストの勝利は確立し、小羊の血により清められた者たちの天のエクレスシア(神の国)は、すでに完成されて昼も夜も讚美に溢れていることである(10節、11節)。しかし、地にあるエクレスシアは、今なおサタンとの戦いの渦中にある。サタンの激しく活動するところに、神の力もいっそう強く働いて、苦難の中にある者たちを支える。信徒は、完成された天のエクレスシアを仰ぎ、主の民の勝利を確信しつつ、天において勝負のついた戦いを戦うのであるから、主の戦いには敗北はない。終りの日には、すでに完成されているエクレスシアが天から下り、神の国が地上になるのである。その日を待ち望む者には絶望はない。

(女と竜 ヨハネの黙示録12章 『復活』第371号 1997年8月)